

***** 2004.3.24 発行 *****

Kwacha (クワチャ) はチェワ語で「夜明け」を意味します。

編集・発行：日本マラウイ協会

〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-2-24 青年海外協力協会気付

Tel. 03-3447-2921 Fax 03-5798-4269

Home Page <http://www.joca.or.jp/malaw/malawi-j.htm>

E-mail japan-malawi@mc.newweb.ne.jp

【マラウイ共和国】

面積：118,484 平方 km (日本の約 1/3)

人口：1131 万人 (2000 年推計)、首都：リロングウェ

独立：1964 年 7 月 6 日、公用語：英語、チェワ語

政体：共和制、大統領：バキリ・ムルジ

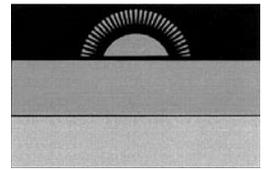
為替レート：US\$1 = MK105.26 (3 月 1 日現在)

MK 1 = 1.03648 (3 月 1 日現在)

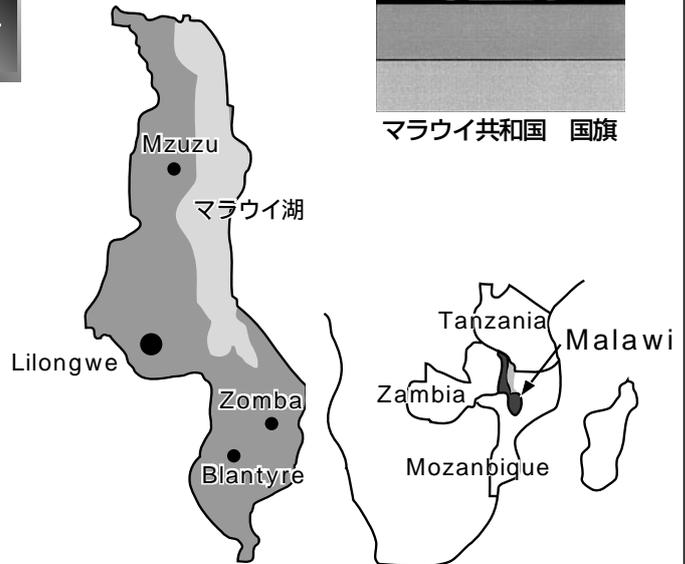
【日本マラウイ協会 (Malawi Society of Japan)】

日本とマラウイ両国間の理解を深め、文化、スポーツ、経済、科学技術等の協力を通じ、相互の繁栄に寄与することを目的とする任意団体です。趣旨をご理解の上、広く各位の入会を希望します。

会員数：259 人 (3 月 1 日現在)



マラウイ共和国 国旗



■マラウイ大統領、 当会役員と接見

マラウイのバキリ・ムルジ大統領は第 3 回 アフリカ開発会議 (TICAD III) に出席のため 2003 年 9 月 28 日來日した。マラウイの大統領が来日したのはこれが初めて。大統領は同夜、小泉総理大臣と首脳会談を行い、翌 29 日から 10 月 1 日まで TICAD III 会議に出席、2 日から 4 日まで大分県を訪問した後、10 月 7 日 (火) 午後、東京都内のホテルで当会役員と接見した。接見には数原孝憲会長 (元青年海外協力隊事務局長) と青年海外協力隊 (JOCV) マラウイ派遣 OB である貝塚光宗 専務理事 (46/1・測量)、山村俊之 理事 (47/1・建築設計)、吉田均 理事 (52/1 後・上下水道)、上田秀篤 理事 (53/2 後・無線通信機) の 5 名が出席、マラウイ側からは外務大臣、教育大臣、観光大臣、駐日マラウイ大使らが同席した。



▲ 署名帳にサインするムルジ大統領 (右) と数原会長 (左)

冒頭、ムルジ大統領は日本の青年海外協力隊員の様々な分野での活動を高く評価すると共に、帰国後も日本・マラウイ両国間の相互理解・親善等の活動を展開している当会に対し、謝意を表明された。

これに対し数原会長は、マラウイはこれまでにアフリカの中ではもとより、今では最も多くの協力隊員を受け入れている国であることに触れ、協力隊員の活動に対する同国政府の様々な配慮・協力に感謝の意を伝えた。また、出席した 4 名の OB がそれぞれ協力隊員として活動した期間と任地、活動の概要を紹介した。そして、数原会長が当会の編集・発行した国情紹介誌「Malawi - The Warm Heart

of Africa 第 2 版)、マラウイ旅行ガイドブック「暖かきアフリカの心 - 湖とサバンナの大地へ」、「チェワ語辞典改訂版」を贈呈したところ、大統領をはじめマラウイ側大臣らは自ら手にとってページをめくり、このような刊行物の存在に驚かれ、その必要性・重要性を強調された。

接見は大統領の気さくな人柄を反映したもので和やかに進み、出席した OB 達の旧任地の変化・発展ぶりなどへ話は及んだ。大統領からは帰国後の OB・OG 達に対し、是非マラウイを再訪して欲しいとのメッセージがあった。

接見は 30 分あまりにわたり、最後に記念撮影を行い終了した。



▲ ムルジ大統領らと数原会長・当会役員

出張報告 マラウイ大統領 招待 出張報告

日本マラウイ協会会長 数原孝憲は前記事の接見時、バキリ・ムルジ大統領からマラウイ訪問の招待を受け、2003 年 10 月 24 日 (金) から 11 月 13 日 (木) まで 3 週間にとり同国へ出張した。ここにその出張報告を掲載する。

2003 年 12 月 17 日

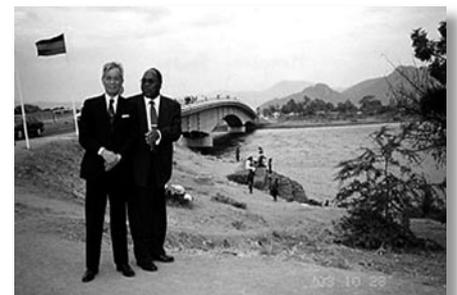
日本マラウイ協会会 数原孝憲

【日 程】

<10月>

- 24 日 (金) 成田発
(ロンドン・ヨハネスブルグ経由)
- 25 日 (土) ブランタイア着
- 26 日 (日) ムランジェ・ソノバ視察
ステート・バンケット
(タンザニア大統領歓迎)

- 27 日 (月) ケザ貸事務所ビル落成式
ソマチ湖 JICA プロジェクト視察
(漁業開発調査)
マンゴチ着
- 28 日 (火) MASAF III 発足記念祝典
(マラウイ社会活動基金)



▲ 日本の援助でできたマンゴチ橋をバックに、チカゴ駐日大使と筆者

- 29 日 (水) マンゴチ発
モンキー・ベイ
(マラウイ湖客船母港)
マクレア岬
ブランタイア着
- 30 日 (木) JICA 事務所
- 31 日 (金) リロングウェ発
ブランタイア着
チカゴ駐日大使著書 Crossing
Cultural Frontiers 出版記念祝会

<11月>

- 1 日 (土) 与党 UDF (United Democratic Front) 党大会
大統領私邸夕食会
(主賓、食前大統領と会談)
- 2 日 (日) キリスト教宣教 110 年記念礼拝
(大統領夫妻出席)
- 3 日 (月) 休養
- 4 日 (火) ブランタイア発
リロングウェ着
- 5 日 (水) JICA 協力隊プロジェクト視察
(ロビ適性園芸技術普及)
- 6 日 (木) 協力隊理数科教師派遣校視察
(ミスレ・チテゼ両中学校)
- 7 日 (金) リロングウェ発
協力隊理数科教師派遣校視察
(カバジ・マローサ両中学校)
協力隊作業療法士派遣所
(ブランタイア)
- 8 日 (土) 帰国協力隊員歓送会
- 9 日 (日) 聖歌隊合同演奏会
(フランス文化センター)
- 10 日 (月) 休養
- 11 日 (火) パタレ外相表敬
在ザンビア久島参事官・JICA 加藤所長と
打合せ

チカゴ駐日大使宅夕食
12日(水)一村一品運動発足大会
(数原ステートメント、久島ステートメント、大統領演説)
プランタイア発
(ヨハネスブルグ・香港経由)
13日(木)成田着

I. ムルジ大統領の訪日と招待

第3回アフリカ開発会議(TICADⅢ)に出席のため訪日されたムルジ大統領を10月7日協会理事数名と共に宿舎に表敬訪問した際、大統領から直接訪問招待を戴き、正式の招待状を受領した。前々からマラウイ訪問の強い希望持っていたのでこれを受け、3週間に亘る、初めての同国訪問が実現した。これで、名実ともにOG/OB会員諸兄弟と並ぶ、マラウイ協会会長になれたと感謝している。

II. ムルジ大統領と新著「民主主義者の声」

大統領表敬訪問の際、大統領から戴いたのが本著(原題"MAU ANGA" THE VOICE OF A DEMOCRAT: PAST, PRESENT & FUTURE)。直筆で会長たる私宛に'thank you for serving Malawi'と記し署名。歴代の会長、役員、会員諸兄弟への謝辞と受け止め、有り難く頂戴した。

本著は、1964年の独立(旧英保護領ニヤサランドから)後継続したバンダー党独裁政権を離脱し、83年地下抵抗運動を開始、94年以降複数政党民主政権を樹立、維持発展させて来たムルジ大統領の基本的な政治理念や経済・社会改革の目指すものを明確に記している。その主要なものは、

イ、秘密主義の排除(貧困・エイズも直視)

ロ、民主的平和的政権交代

ハ、貧乏の追放

(社会活動基金: MASAF の設立)

ニ、地方の活性化

ホ、国営企業の民営化

ヘ、国民の意識改革と教育の充実

(初等教育無料化)

ト、孤立主義脱却(近隣諸国との関係改善)と国際協調(ルワンダ、コンゴ、コンボPKOへの出兵)等

本著作を一読して出発した。

III. 出張日程と成果

大統領招待によるマラウイ政府賓客待遇の訪問で手厚い配慮を得、先方作成の日程に沿って大統領の主要行事(タンザニア大統領歓迎晩餐会、政権党 UDF 党大会、第3次マラウイ社会活動基金: MASAF III 発足記念祝典、キリスト教宣教 110 周年記念礼拝等)に連日同行、日本人の目・耳が届かない国の様子を密着取材する機会を得たほか、大統領私邸での夕食、パテル外相表敬等があり、その過程で大統領夫妻、外相、ムタリカ次期大統領政権候補等の要人多数と面談の機会を持つことができた。



▲ UDF 党大会で演説するムルジ大統領

加えて、当初予定を延ばして一村一品運動発足ワークショップに参列、日本大使館代表と並んで発言し、大統領の決断を称え、その成功を祈念した。また、JICAの協力を得て協力隊活動の現状視察も行なった。これらの諸日程を通してマラウイの自然、国土、人々の生活、文化にも触れ、マラウイに対する理解を深めた。同時にその抱えるこれからの課題の大きさ、困難な国造りに立ち向う大統領と国民の真剣な眼差し、日本に対する畏敬の念と強い期待を感じ取ることが出来た。

注: MASAF - MALawi Social Action Fund

IV. 目と耳で得たマラウイの国情

(1) 民主化の進展

連日、大統領の出席する諸行事を観察して、リーダーと大衆の間の対話(シュプレヒト・コールに始まる)と信頼に支えられたマラウイ流の民主化が安定した軌道に在ることを感じた。対話の中で大統領は、自らの言葉で国民に語り、貧困・疾病の中で進めるアフリカの民主化が日本、韓国、イタリアに比べ如何に困難か、その克服のために全国民が立場を超えて取り組むべし、それにより民主化が国民の支持を得ると説いた。その一方で、見るべき政治・経済・社会変革(政府批判の自由、MASAF 資金による農村開発と地方の学校・道路・橋の建設、初等教育の無償化等)と生活上の成果(かつてマラウイの女性は南アフリカの男性との結婚を志望、リロングウェ・プランタイア間の運転時間の短縮等)を謳歌し更なる努力と勤勉を訴え、政権党次期大統領候補を指名し、野党候補との自由な選挙(2004年5月)による民主的政権交代を掲げた。(人権保護目的での公文書の保存と閲覧の自由や英国人講師による治安取締り警察官の訓練などの報道も読んだ)。

(2) 一村一品運動の発足

1 一村一品運動は、マラウイ国民(85%が農業に従事)の主体的自助努力に基づく生産性、収入、雇用向上により貧困撲滅をはかる重要施策として、これまで JICA の支援と大分県(平松前知事が創始者)の指導により、マーケティング支援と人材育成目的で4件のパイロット・プロジェクトが実施されてきた。大統領は今般の訪日の際、自ら大分県を訪れその実態と成果を見、マラウイで全国規模でこれを実施する政治決断をし、その発足ワークショップが大統領の出席の下、日本の支援により11月11・12の両日プランタイアで開かれ、わが国から大使館、JICA 関係者に加え私も出席した。

2 大統領は発足演説の中で、これまでの日本の支援への強い感謝と JICA の支援継続への強い期待・見通しを表明、さらに米・英等他の先進国の資金協力を訴えた他、愛国的見地に立ってワークショップに全政党関係者を招いたと述べた。以上の他、大統領が演説の中で指摘した諸点次の通り。

イ、この運動は究極の貧困削減対策(新しい生産物の発掘、小規模産品の市場への新しいアクセス、付加価値の向上、外貨節約と輸出の促進)

ロ、具体的産品(各地名を付して: パナナ、果物、魚、蜂蜜、豆類、鶏肉、家具等の他観光や無形文化を含む)

ハ、地方分権と農民の意識改革(日本人の勤勉さ)

ニ、民間セクター主導(政府は側面援助)

ホ、この運動は上海(ONE FACTORY ONE

PRODUCT)、ルイジアナ州(ONE PARISH ONE PRODUCT)でも成功。

3 大統領演説の前にマラウイ協会会長として発言の機会が与えられ、その中で、私は、大統領の政治決断に敬意を表するとともに、「この運動が今後5、10年の間にマラウイの国土、国民、文化に根ざしたマラウイ独特の一村一品運動に発展するよう強く期待、確信するとともに、更なる関心と忍耐を持って見守り続けたい」と発言した。



▲一村一品運動発足大会でスピーチする筆者

4 続くワークショップでは、ムタリカ次期大統領候補(経済計画・開発相)の司会の下、市民団体、商工・畜産・観光各業者の他、チカゴ駐日大使が見解を述べ、運動事務局(大統領が議長)と地域別実行委員会の設置を決定、閉会式に大統領も出席して終了した。

(3) エイズとの闘い

出発前、人口1100万人のマラウイで毎日139人がエイズで死亡、47万人の孤児があり、平均寿命が39歳(2000年)まで下がった(ユニセフ在マラウイ駐在員の富田真紀さん談。10月20日付読売朝刊)と知って、現地での取り組みに関心を抱いた。かつて協力隊事務局長の時、医療関係隊員の対策に万全を期したことも想起した。

現地で先ず耳にしたのは宣教110周年記念礼拝での大統領の演説で、エイズの脅威を正面から取り上げ、神の教えを守り乱交の戒めを説いた。私的夕食の際に同席した軍の高官は最大の敵がエイズだと述べた。現地の報道も12月1日の「世界エイズ・デー」に合わせて「恥辱の念に挑戦し前向きに取り組み(Be Positive, Fight Stigma!)」を標語に「2003/2004 WORLD AIDS CAMPAIGN」を展開し、各宗教団体、職場、法律・政策策定機関、教育・保健機関、家庭等を総動員して、検査と投薬(伝統的薬物を含め)を勧めた。

(4) 進む近隣諸国との協力

マラウイ到着の翌26日、隣国タンザニアのシカパ大統領がプランタイアに到着、外交団と共に歓迎晩餐会に出席した。両大統領は共に相手国の政治的安定と経済開発への取り組みを称え、南部アフリカ開発共同体(SADC、14カ国が加盟)の議長国がマラウイからタンザニアに変わった後を受けて互いの成果を祝福してエールを交換したが、両国がジンバウエの内紛解決に如何に協力するかが取り上げられると報じられた。

昨年8月のプランタイア開催に続く本年8月のダルエスサラーム SADC 首脳会議では包括的経済開発計画が承認され、域内の横断道路整備も進められる。これらの他、マラウイは、アフリカ連合(AU)、アフリカ開発のための新パートナーシップ(NEPAD)の場でも積極的な外交を進めている。

(5) マラウイのキリスト教

11月2日(日)の宣教110周年記念礼拝にイスラム教徒のムルジ大統領夫妻が列席し、大統領が聖書の聖句を朗読したのには驚いた。同集会で大統領は演説し、キリスト教と政府は共に協力して国民のために尽そうと語り、続いて、双方は互いの分限を守り干渉しないよう呼び掛けた。キリスト、イスラム両教の他にマラウイには伝統宗教があるが、宗教による対立が国内の不安定に発展することはないと感じた。



▲長年宣教牧師表彰式にて、右からムルジ大統領、パトリシア大統領夫人、ピング・ムタリカ次期大統領与党候補(計画大臣)

この国の賛美歌はアフリカ独特のビート・リズムに合わせ腰と体全体をスイングさせながら歌われる。11月9日(日)フランス文化センターでの合同聖歌ショウに出掛けたが、ディスコさながらの陽気な雰囲気であった。

V. 協力隊活動の現状

マラウイでの協力隊活動は協力隊事業発足とともに旧く、その派遣実績は累計1169人、アフリカで第1位、全派遣国中フィリピンと1、2を争う実績を持つ。隊員が大統領官邸招待されるなどマラウイ側の評価も高く、大統領訪日の際の首脳会談でも話題となった。



▲ロビ地区隊員と筆者

派遣中隊員数41人(10月末現在)で、職種は保健・衛生(薬剤師、看護師、作業療法士、公衆衛生)、農業(野菜、稲作、果樹、土壌)、家畜飼育、獣医師、養殖、生態調査、理数科教師、建築、自動車整備、体育、婦人子供服、コンピューター技術、村落開発で、マラウイ全土に展開している。



▲マローサ中学にて浜田隊員、生徒達と筆者

今回のマラウイ訪問で数ヶ所の現場を視察した。国の貧しさから来る困難(事業所の資金・人材不足、生徒の脱落)や厳しい生活環境の中で、職場の人々の友情、他の隊員仲間のお励まし、JICA 職員の支えを受けて遅く育っていく様子は変わらない。プランタイアでの歓送会で、女性帰国隊員が、1年目の挫

折は2年目に良くなった、無理にマラウイを好きにならなくても良いと思って2年を過ごした今、嫌いの思いは消え、好きになっているとの実感を感じたのに新たな感銘を受けた。

VI. チカゴ駐日大使と 新著「文化の境界を越えて」

今回のマラウイ訪問時、駐日チカゴ大使の新著「文化の境界を越えて(CROSSING CULTURAL FRONTIERS)」の出版記念祝会が盛大に行なわれた。この著作の中で大使は、1年半の日本国内視察の成果に触れ、「トヨタ」の企業文化、新潟の稲作・灌漑と米の二次生産物、大分の「THINK GLOBALLY ACT LOCALLY」スローガン、北海道滝川の果物生産と簡単な技術を使った加工産品等に言及しているが、著者の目はマラウイの工業生産に固有の水準を見事に焦点を当てており、国家建設に役立てたいとの思いが伝わってくる。マラウイの一村一品運動もここから生れたのは想像に難くない。

チカゴ駐日大使は、ムルジ大統領のマラウイ国内での実績成果を踏まえての訪日と首脳会談、そして一村一品運動の新しい展開を経て両国関係は新しい段階に入ったと述べた。これまでのわが国のODA支援とJICAの協力活動の実績がその背後にあるが、その中で協力隊は草の根レベルでの人物交流で両国間の心の絆を強化している(ムルジ大統領の言葉)。その心の絆を基礎に協力隊のOG/OB 諸兄弟が結成した「日本マラウイ協会」は今年(2003年)創立20周年を迎え、この間、在日マラウイ大使館と密接に協力して活動しながら両国民の架け橋の役割を果たしてきた。協会会員と共にこの役割をこれからも続けて行きたい。

以上

寄稿 I

Malawian Life in Oita

留学生 Kachigamba Lawrence Titani

皆さん、はじめまして。ボクはリロングウェから日本へ留学しているローレンスです。今、大分県別府市にある立命館アジア太平洋大学で国際経営学を学んでいます。

2年半前、日本について何の予備知識も無いまま単身やって来たわけですが、ここ大分の地で思いがけず色んな「マラウイ」に出会うことができました。

まず驚いたのは、大学から車で10分位の所に「アフリカンサファリ」という自然動物公園があることです。ボクは生まれて初めてゾウやキリンやライオンを間近で見ることができました。まさかこの発展した日本で野生動物にお目にかかるなんて夢にも思いませんでした。

次にビックリしたのは、大分駅前のメインアーケード、セントポルタ中央町の一角に「ZIKOMO」という名前の舶来雑貨屋があるのです。何でもこのオーナーがアフリカを旅行した時、マラウイで覚えた「ZIKOMO」の響きが気に入って自分のお店の名前にしたそうです。アフリカや東南アジアから輸入したアクセサリー類を豊富に取り揃えているので、大分に来たら是非立ち寄ってみてください。

さらにワクワクしたのは、2002年に開

催されたサッカーワールドカップです。カメルーンチームが何日も遅れてキャンプしたことで一躍有名になった中津江村は大分の山奥にあります。大分市ではビッグアイという競技場で3試合行われ、最終戦のセネガル対スウェーデン戦では声を漕がしてセネガルチームを応援しました。2年後のドイツ大会には我がマラウイチームが出演してもらいたいものです。



▲ZIKOMO 店で一躍有名になった中津江村は大分の山奥にあります。

そして一番おたまたまあげたのは、チェワ語を喋る日本人がいたことです。わざわざ大学まで会いに来てくれた



▲シェイクハンズ

上好貴子さん(JOCV平成10年度2次隊、Liwonde、生態調査)と草地千里さん(JOCV平成3年度2次隊、Dedza、果樹)です。二人はそれぞれの家にボクを招いてくれて、日本人の暮らしぶりや日本語の歌を親切に教えてくれます。今ハマってるのが、テレビマンガ「あたしんち」の主題歌、キンモクセイが歌う「さらば」という曲です。♪こんにちは、ありがとう、さよなら、また会いましょう…これをチェワ語で歌うとピッタリ合せてなかなかイケルんですよ。

昨年10月には嬉しいことがありました。ムルジ大統領閣下一行が、一村一品運動とやらの視察のため大分県にお越しになり、ボクの大学へもお見えになって親しく接見することができたのです。マラウイ国内に居たらこんな光栄な事なんて有り得ないのに! 国家元首がこの大学を訪れたのは初めてとのことで、閣下には学長から名誉博士号が贈呈されました。

「事件」が起きたのはその夜のことでした。閣下の歓迎晩餐会に参列する榮に浴したボクは末席に座し、マラウイ政府高官の方々と久しぶりにチェワ語での会話を楽しんでいました。すると突如マコーハドレスを身にまとったオッサンが壇上に駆け上がるや否や「プレジデント ウォーム ヤーヤーングァーズィー ドクター バキリムルジー…」と大声を張り上げる。パンダ前大統領じゃあるまいし「ングァーズィー」とは失敬な。挙句の果てに横笛吹いて独特のダミ声で往年のコメディアン、マドロの物真似をやらかすなんてもう開いた口が塞がらない。ポカンとした日本人を尻目に、ボク達マラウイアンは腹がよじれるほど笑い転げちまいました。其奴が何者であるかはご想像にお任せします。

卒業まであと1年半。どんな試練が待ち受けているかわからないけど、ここ湯の街別府で温泉につかりつつキャンパスライフを謳歌しようと思ってます!

(文責:草地)

ムルジ大統領と



寄稿 2

国際協力フェスティバル
2003

H9-2 獣医師 江上三喜子

2003年10月4・5日(土・日)、東京・日比谷公園にて国際協力フェスティバル2003が開催されました。ここでは、協力隊OB/OG、JICA、NGO、NPO団体、国連組織等のブースが立ち並び、それぞれの活動等が紹介されました。また、世界各国の雑貨や食べ物も味わえ、とても賑やかで活気に溢れていました。

今回からブースの配置が大幅に変わりました。日本マラウイ協会のブースは外周に位置していましたが、横道からの合流地点の目の前だったため、「あら、何かしら?」と立ち寄る方もおり、なかなかの好位置であったと思われました。

2003年は当協会設立20年という節目の年でもあったため、マラウイ国内の写真パネルの他に、当協会の活動を紹介したパネルも作製し、展示しました。立ち止まって熱心に読んでおられる年配の方、若いカップル等を見たときは、うれしくてニッコリと笑みがこぼれていました。

今回は、民芸品やチェフ語辞典等の当協会

刊行物の他、OB/OGから持ち寄られた土産品も販売しました。前回人気のあった木彫りの象は、今回1日目に完売。2日目はほとんど飾る民芸品もない寂しい状況でしたが、OGが寄付してくださったマラウイ音楽テープをかけると、ブース内スタッフも慣れ親しんだ懐かしい音楽に自然に体が揺れ始め、表情も柔らかく楽しそうに見えました。アフリカ音楽に興味を持って、ブース前で足を止めた方もおられました。



▲当会ブースの遠景

フェスティバルに参加して何が楽しみかといえば、いろいろな方々に出会えることです。同期との再会も含め、協力隊の派遣前訓練にこれから入るという方が情報収集に来られた

り、何十年も前の協力隊OVが懐かしさに顔を出されたり、日比谷公園で何か楽しそうなことをしているなあど何気に立ち寄る人がいたり様々です。そういった方々とのちょっとした交流がお互いの刺激となり、また活力になるのだと感じました。

わたしは今回が2回目の参加でした。次回の国際協力フェスティバル2004をさらに楽しく、より充実した一日を過ごせるよう、皆さんと一緒に参加してみませんか?

《日本マラウイ協会》
平成15年9月～16年2月活動内容

- ①【9月24日】機関紙 KWACHA 第30号発行
- ②【10月4・5日】国際協力フェスティバル2003へ出展(4面の記事参照)
- ③【10月7日】マラウイ大統領接見(1面の記事参照)
- ④【10月24日～11月13日】数原会長、大統領招待によるマラウイ出張(1～3面の記事参照)
- ⑤【12月17日】数原会長マラウイ出張報告会
- ⑥【12月】ホームページの更新
数原会長マラウイ出張報告ページ新設



日本マラウイ協会情報



■第22回通常総会のご案内

日本マラウイ協会は5月に第22回通常総会を別紙のとおり開催します。会員の皆様は同封の葉書にて出欠をご連絡下さい。

■新刊案内

「マラウイを知るための45章」という本が発刊されました。

・2004年2月発行 四六版 295ページ 2,000円+税

・ISBN4-7503-1849-3

・著者：立教大学教授 栗田和明

・発行所：株式会社 明石書店 TEL 03-5818-1171

FAX 03-5818-1174

45章にわたって、国全体の姿、歴史、産業、各地の様子、生活の基盤、毎日の生活、他国との関係が紹介されています。マラウイの国土、産業、文化が周辺国との比較を通して、豊富なエピソードをもとにわかりやすく語られています。また、マラウイの諸相が具体的な事象で示され、身近な事例・数値と比較、豊富な写真と共に紹介されています。明石書店のホームページ (<http://www.akashi.co.jp/>) から郵便局の「代金引換」方式で注文可(税・送料込み2,400円)。

■KWACHAバックナンバー

当会は今年2月26日に創立21周年を迎えましたが、創立時の機関紙 KWACHA 第1号から第31号(今号)までの全バックナンバーをPDFファイル化し、当会ホームページに掲載しています。是非ご覧下さい。

URL: <http://www.joca.or.jp/malaw/malawi-j.htm> から「日本語」を選択、左端のメニューから「機関紙 KWACHA」をクリックすると、右ページに号数一覧が出てきますので、希望の号数をクリックしてください。

■日本マラウイ協会の刊行物

① チェフ語辞典 統合改訂版 (2000年7月発行)

B5版 186ページ 1部 1,500円(送料290円)

② マラウイ旅行ガイド 新訂第2版 (97年7月発行)

「アフリカの暖かき心、湖とサバンナの大地へ」

B5版 108ページ 1部 1,200円(送料210円)

③ 国情紹介誌「Malawi - The Warm Heart of Africa」第2版
(94年7月発行)

A4版 40ページ 1部 1,000円(送料210円)

送料は「冊子小包郵便物」扱いで表示しています。複数種を1冊づつご注文の場合は次のとおりです。

①+②=340円

②+③=290円

①+③=340円

①+②+③=340円

各書ご希望の方は、本ページ最後の入会方法の欄に記載の郵便振替口座または銀行口座宛に、代金および送料をお送りください。その際、郵便振替の場合は振替用紙の通信欄に必ず「xxxx xx冊希望」と明記してください。銀行振込の場合は事前に必ずE-mail、あるいは電話/FAXで「xxxx xx冊希望」と当会宛連絡してください。

■ご意見、ご質問をどうぞ

日本マラウイ協会に対するご意見、ご要望、ご質問などありましたら、下記当協会宛へご遠慮なくお寄せください。また、電子メールによるマラウイ関連情報の配信も行っておりますので、電子メールアドレスをお持ちで、ご希望の方は、あわせてご連絡ください。

■日本マラウイ協会 月次定例会

日本マラウイ協会では、原則毎月第3水曜日18:30～に、東京都内(通常はJOCV 広尾訓練研修センター 1F 研修室2)で、月次定例会を開催し、マラウイ関連の支援活動などについての討議や、マラウイ関係者間の情報交換などを行っております。参加は会員でなくても構いません。初めての方も大歓迎です。詳しくは当協会までお問い合わせください。

■日本マラウイ協会 入会方法

ご連絡いただければ入会申込書をお送りしますので、各項記入の上ご返送ください。E-Mailで入会希望の旨を連絡くださっても構いません。また、入会金と年会費の合計(個人正会員の場合1,000円+3,000円=4,000円)を下記の銀行口座または郵便振替口座へお送り下さい。(郵便振替口座が安くて便利です)

〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-2-24

青年海外協力協会気付

日本マラウイ協会

TEL: 03-3447-2921 FAX: 03-5798-4269

E-mail: japan-malawi@mc.newweb.ne.jp

UFJ銀行 東恵比寿支店 普通口座 255739

口座名義人

日本マラウイ協会事務局 貝塚光宗

郵便振替 00190-7-13125、加入者名 日本マラウイ協会

また、協会規約その他についても上記宛お問い合わせください。